

# 互垣根を越え交流を図りながら 互いのレベルアップを目指す

ホスピス基礎講座

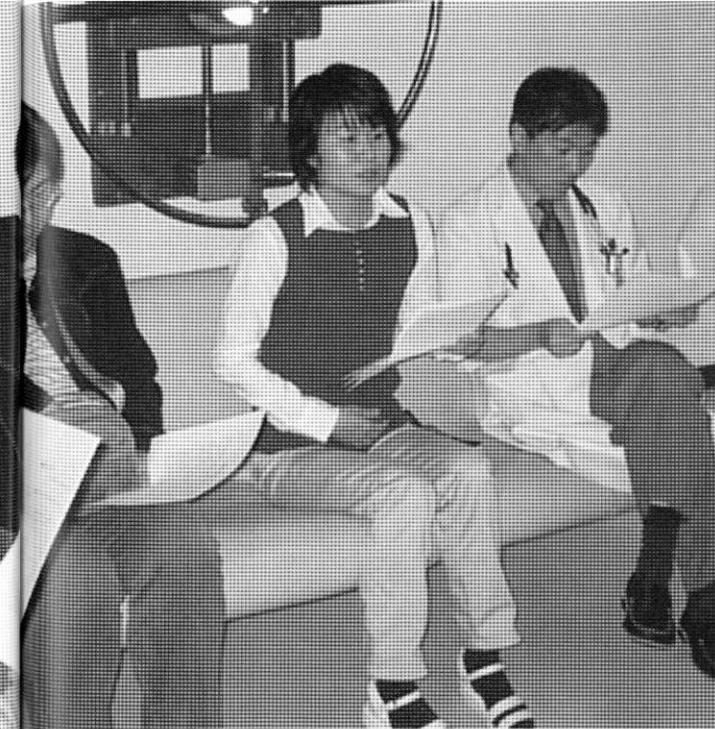
(7)

七月から月一回の「ホスピス勉強会」を院内で開催

医療法人敬仁会函館おしま病院理事長・院長

福德 雅章

ふくとくまさあき 昭和三十六年函館市生まれ。金沢医科大学卒業後、同大学血液免疫内科助手や同大学血液センターの副部長を兼任。平成十年には栄光病院(福岡県)の緩和ケア病棟に勤務。平成十四年一月から函館おしま病院(旧渡島病院)に勤務。一月より同病院の理事長・院長に就任。



9月に開催された第3回ホスピス勉強会。写真中央は「家族へのケア」というタイトルで講師を勤めた鶴田看護師。鶴田さんはホスピスの現場で7年間の経験を持つ。

七月二十五日から勉強会を始めています。当初はホスピス開設に向けて、当院のスタッフだけで進めていこうと思っていたのですが、これからホスピスを本格的に運営していくにあたっては、他の医療機関、訪問看護ステーション、各施設など色々な部門との関わりや地域の方たちの理解が不可欠です。さらにボランティアの育成にも力を注がなくてはなりません。

現に、今でもホスピス相談を受けたり、他の医療機関や訪問看護ステーションから末期がんの方の入院や訪問診療の依頼を受けることも多いですし、スタッフ同士の連携とお互いのレベルアップも必要となっています。

まず、初回ということで、ホスピスに携わる者、或いはもつと突き詰めて、医療に関わる者として持るべき姿勢、ということで話をしました。

ホスピスが医の原点であるということの一つに、病める方たちを「治してやる」という姿勢ではなく、全人的に「支える」という医療者側の姿勢が言われています。

この勉強会では、まず、ホスピスの特徴の一つである「全人的ケア」とはどういうことなのかを考えました。そして、スタッフに求められるものとして、「寄り添う姿勢」、「もてなしの心」、「気づきと感性」、「コミュニケーションスキル」、「セルフコントロール」などを挙げました。死を前にした方と対峙するということはスタッフにとって大変厳しく、

前にも申し上げましたように、この勉強会では色々な方が垣根を越えて、互いに交流を図りながら、それぞれがうまくこの場を活用していただければ嬉しいですし、そのことは結果として患者さまのお役に立てるのではないかと思います。

◆第一回目「ホスピススタッフに求められるもの」 担当・福德

患者とのコミュニケーションが不十分であったり、痛み（全人的）のコントロールがうまくいかない場合は、しばしば自分たちを責めてしまいがちです。ケアをする側は、患者やその家族の立場を自分に置き換えて考える一方で、あまりにも感情移入し過ぎないよう、客観的に見つめる視点が大切であると考えています。そのためには自己も冷静にコントロールできる力が必要と感じます。

### ◆第二回目 「患者さまの心を理解する」 担当・間島看護師長

ホスピスに来られた患者や家族の方から、「ここに来て良かった」、「ここに来てほっとした」と言う言葉がしばしば聞かれます。日本のお寺の第一人者、柏木哲夫先生（金城学院大学人間科学部教授）は、そのことについて「医師や看護師たち（医療者側）が自分たちの気持ちを理解してくれた」という思いから出たものであると解説していますが、これは他ならず互いのコミュニケーションの良さから生まれるものだと思します。とりわけ、ホスピスではコミュニケーションが重要な柱となります。

勉強会では、まず末期がんの方および家族の方の心理状態について、エリザベス・キューブラー・ロス博士（「死ぬ瞬間」の著者）やアルフォンス・デーケン教授（上智大学名誉教授）が分析されたことをまず確認し合いました。そして、私たちがそのような方たちにどのようにアプローチすべきなのか、というコミュニケーションスキルについて、ロールプレイングも交えて学びました。

### ◆第三回目 「家族へのケア」 担当・鶴田看護師

ホスピスでは、患者本人はもちろんですが、その家族も支えることが重要であり、それは患者が亡くなられてからも続きます。ここでは、家族の定義、現代の日本における家族のあり方を踏まえた上で、ホスピスの現場で家族が持つ二つの側面について学びました。

一つには、患者を支えていく役割を持つ、すなわちスタッフとチームを組む人という側面で、もう一つは、大切な人を失うという苦悩を抱えた人という側面です。家族をこの両面から捉え、実際にどうかを考えました。特に、鶴田看護

の倫理」という言葉ですが、その歴史は古代ギリシャ時代の医師ヒポクラテスの誓いに始まります。この誓いは、西洋医学の発展の礎となりましたが、一方で医師の立場に立ったものではないことから、パターナリズム（父権主義）という言葉が生まれ、問題視されなくなりてからも続きます。ここ

では、家庭の定義、現代の日本における家族のあり方を踏まえた上で、ホスピスの現場で家族が持つ二つの側面について学びました。

一つには、患者を支えていく役割を持つ、すなわちスタッフとチームを組む人という側面で、もう一つは、大切な人を失うという苦悩を抱えた人という側面です。家族をこの両面から捉え、実際にどうかを考えました。特に、鶴田看護

### ◆第四回目 「医の倫理と自己決定権」 担当・福徳

一方、医学の急速な進歩とともに、「医の倫理」が改めて考え直され、また人権運動も活発化するものと確信しています。

師からは七年間というホスピス現場での経験から、色々な事例を紹介してくれたことで、改めてホスピスケアの難しさを出席した皆が実感しました。

最近、何かとよく耳にする「医の倫理」という言葉ですが、その歴史は古代ギリシャ時代の医師ヒポクラテスの誓いに始まります。この誓いは、西洋医学の発展の礎となりましたが、一方で医師の立場に立ったものではないことから、パターナリズム（父権主義）という言葉が生まれ、問題視されるようになります。つまり、「患者を診てあげる」、「治してあげる」といった姿勢や、「おまかせ医療」というように、患者の側から意見や希望を言いにくく、聞きにくいといった状況で、いつしか、医療の現場はそれがごく自然の形となってしまったわけです。

少しでもホスピスについて興味を持つていたり、また、現場で末期がんの方を支えていく上で苦労していたり、もつと学んでいきたいという方がいらっしゃいましたら、お気軽に参加していただければと思います。そして、そのことは、少なからず函館におけるがら、お気軽に参加していただければと思います。